

グリーン・ツーリズム その日本の背景

日本にグリーン・ツーリズム(以下G.Tと略)が提起されて一五年が経過した。その背景には、戦後の地域開発政策や農政の様々な矛盾があった。最大の失政はリゾート政策であったが、結果的にマツツーリズムの矛盾は衆知の事実となり、ツーリズムのオルタナティブとしてG.Tが登場した。

戦後一貫して農業生産性の向上を施策の中心としてきた我が国の農政が、農業・農村の多面的機能を活かす手法としてG.Tを提起したことは評価に値しよう。農政担当者は、都市住民のライフスタイルとしてのツーリズムの重要性について遅まきながら認識し、都市住民の滞在型交流活動を、政策支援の対象とするに至ったのである。

こうした国の政策転換に対し、現場の農山漁村や農民が素早い対応をしたかといえれば、決してそうではない。その背景には、農山漁村特有の閉鎖性や保守性があったが、政策展開への最大の障壁は、制度、文化、意識の三重苦ともいえる特殊な日本の制約条件にあった。結論的にいえば、それは、旅館業法はじめ各種

新たな都市農村関係の構築に向けた グリーン・ツーリズムの意義と課題

オルタナティブなツーリズムの萌芽を踏まえて

青木 辰司

Written by Shinji Aoki



イギリス・コッツオルズの農家民宿ボーズヒルファーム

規制の存在、年次有給休暇に関するILO国際条約一三三号批准の未達成、「横並び主義」による個人的專業化への社会的制約に集約される。

こうした社会的不利性の下で、九〇年代後半に一拳にG.Tが広まったのは、実践者レベルのネットワーク化、一部地方自治体による行政支援、研究者による社会的啓発等の実践的蓄積があったことによる。筆者も、こうした実践支援に積極的に関わってきたが、東北地方で築いた実践者のネットワークが、一昨年、全国的なものになった。その結果、毎年「全国G.Tネットワーク大会」が主な実践地域で開催されるようになり、それを支援するNPO法人「日本G.T・ネットワークセンター」(以下G.TNETと略)が、一昨年に誕生している。

日本型グリーン・ツーリズムの展開

一九七〇年代に西欧各地で定着していたGTは、約二〇年遅れながら、我が国に浸透しはじめている。その特徴は、我が国の農山漁村の持つ特殊性に起因しているといっても過言ではない。岩手県遠野市や大分県宇佐市安心院をはじめ、日本型GTの先駆的実践地域に共通するのは、農業生産や農村生活では、条件が不利な地域といわれる「辺境」の地での確かな実践にある。

ここでは、西欧のGTの先駆性を学びつつも、小規模で集約的な農業に基づく高齢者や女性中心の家族労働という、特殊な日本の条件を活かしていることが興味深い。「農村民泊(農泊)」



イギリスの農家民宿ローファームでの朝食のメニュー注文風景

という素朴でも感動が生まれる交流型GTや、「日本型ワーキングホリデー」と称した労働提供と宿泊料を相殺する互酬的GT、「ツーリズム大学」への「入学」をとおして継続的に交流す

る学習型GT等は、西欧には見られない極めてユニークなGTである。

こうした「日本型GT」が急速に広まりつつあるのは、筆者が「身の丈の実践」と強調する段階的な実践手法と、単なるビジネスではなく、ツーリストとホスト双方に社会的自己実現が達成される「歓交」という、これまでの観光事業とは一線を画す実践理念が共有されたことによる。また近年では、「地産地消」や「フード」といった市場原理に対峙する食と農の地域密着型実践や、「食農教育」や「体験型修学旅行」、さらには「滞在型クライアント」(中山間地域立地の市民農園)、園芸福祉と「農のルネサンス」ともいえる様々な実践が、多様に各地で展開している。

「日本型GT」は、こうした多彩なメニューを包含しながら、隔絶した都市と農山漁村を結び新たな手立てとして交流活動の深化を促している。これはともすれば、「農村観光」と誤解されがちなGTの実践において、決定的な重要性を有する。都市側の発想や外部資本によつて事業展開しがちのツーリズムを、農山漁村との対等な連携交流として持続化していくためには、主体性と互酬性、そして双方向性の確保が不可欠なのである。

そうした基本理念に立ち、西欧の先駆的実践との普遍的課題と特殊日本の課題を透視する作業が必要である。私が短い英国体験で得た成果は、前者は品質保証の社会的・制度的確立、後者は「Happy Medium」(中庸の強み)にある。

ツーリズム実践の特殊な日本の課題

「西欧輸入型」GTから「日本独自型」GTへの展開段階に入ったといつてよい現在、その特殊日本の課題は、体験主義、画一化の超克、規制緩和と品質管理、市場の未形成とわが村意識からの脱却、個別ビジネス化への新たな行政の役割に集約されよう。

第一点については、農山漁村でのツーリズム受け入れ経験の乏しさが、そうした経験主義を助長したといえるが、「体験合戦」ともいえるGTの「産地間競争」が目立つ。一番の問題は、こうした体験主義は、あくなき企画合戦と価格競争に陥り、観光事業と同様の身体的疲労を伴つて短期的事業に終わる宿命にあることが認識されていないことにある。

第二の課題は、特に重要である。遅まきながら部分的規制緩和が進んだ現在、容易な新規参入が、GT実践の品質低下を誘発する兆しが見られている。年間入り込み数を自慢げに話す農家民宿や、テレビや新聞等で有名になり自己満足に陥る実践が目立ちはじめた。そうした現状では、西欧のような格付け機関による厳格な等級化の導入が困難であるが、「安かろう、悪かろう」の農家民宿や農家レストランの参入を防ぐ手立てが急がれる。

第三に、GTの供給側における盛り上げの一方で、需要側の市場が不透明で、先駆的実践

地域での、前述のような「主観的評価」に依存した「わが村一番」の実践が大半であることが問題である。特定層の継続的交流は、持続可能なGTの必要条件であるが、それに止まる限り、実践拡大は望めない。「団塊世代」の定年期を控え、都市住民のライフステージ問題をツーリズムに活かす絶好の機会であるが、その展望がまだまだ明らかにはなっていない。

第四点は、西欧と比して最も遅れが目立つ課題である。計画普及段階から実践展開段階に入った我が国のGTにとって最も必要なのは、実践者のビジネスセンスの陶冶と地域連携体制確立に向けた行政支援である。こうした自立実践の地域的展開への質の高い行政支援が、全くといってよいほどなされていない現状は、個別ビジネスの自己展開を招来し、やがてはそれが消滅する危険性が目に見えているのである。

「アーバン・ツーリズム」の意義と課題

「つじた我が国のGTの現状に対し、今後の展望の要点は、都市側との新たな連携の構築にある。これまでのGTにおいては、都市はツーリズムの供給基地という需要要因とのみ考えられていた。それは当然のことでもあるが、そこに欠けている視点は、ツーリズム概念に潜む回帰性である。日常空間から非日常空間に身を移し、非日常的時間軸の下で何らかの活動を行い、また日常に戻る。「つじたTour」の原義を踏まえて、その

社会的行為を、ある意味での価値観や主義、原理を下に実践するのがtourismと考えるべきで、それは決して観光概念で包摂されるものではない。

そういう認識に立てば、都市住民の農山漁村へのツアーのみがGTの要素ではなく、農山漁村に住む人々が都市へ足を運び、その地での非日常的活動を経て日常に戻るツーリズムも、それに含まれるといふべきである。

「アーバン・ツーリズム」。あまり聞き馴染みがないこの用語は、そうした双方向的交流によって今後の可能性を示唆してくれる。無機質化したつたある都市社会において、近年内発的に有機的な空間づくりや、より人間的な生活文化を守り、活かす実践が目立ちだした。これらは、農山漁村の住民が都市におけるGTを享受するのに絶好の場であり、確かな交流をおとして、新たな都市農村関係構築を行うのに欠かせない実践の場ともいえよう。

東京都新宿区神楽坂は、粋な店が残る都市生活文化の拠点である。その神楽坂にNPO法人「粋なまちづくり倶楽部」がある。二〇〇三年に、日本的な「粋なまちづくり」の保全継承を目的として法人化され、地域環境を質感高く育む多彩な活動を展開している。昨年は、GNETの活動として神楽坂探訪を依頼し、地元住民による案内によって神楽坂の質感高い生活文化の一端を堪能できた。

同じ東京文京区には、NPO法人「環境

ネットワーク・文京」があり、環境改善に関する多彩でインターミディアリーな活動を展開している。このNPOとGNETとの共催事業として、「エコリサイクルフェア」が昨年開催され、福島県郡山市の生産農家が野菜の販売を行い、都市内部での交流活動を展開した。藩政期には、区内の有名神社仏閣が近在の農家からの生産物を販売する場を提供したという。今後は、つじた寺社を場とした多彩な交流と周辺地域でのツーリズムの展開も期待される。川崎市幸区にあるJR横須賀線新川崎駅隣接の鶴見操車場跡地。かつて京浜工業地帯への原料供給に貢献した貨物列車の操車場が川崎市へ売却された。現在、暫定利用ながらNPO法人「幸

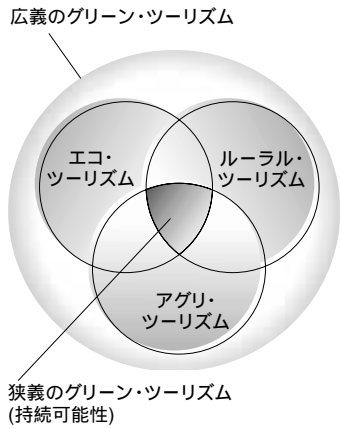


散歩好きイギリス人向けのフットパス入り口

を、大都市の中心地で展開している。お決まりのハート事業計画に反対した住民達が、この地を新たな農的交流空間として創出しようとする動きは、都市への「農」的価値還元という意味で非常に大きな価値がある。それは都市住民としての日常的な農的空間とともに、農山漁村住民の非日常的なツーリズム空間としての複合的な意義を有する共有空間となりうるからである。

成熟国家の形成に向けて

グリーンとは、単に緑多き空間とか緑のある農業や林業という意味ではなく、環境や地域の多様な資源(これには社会的、文化的資源も含まれる)の保全という複合的概念と認識すべきと考える。その意味でGTは、ルラルツーリズムよりは広い概念であり(図参照)、都市における「グリーンな」ツーリズムは立派なGTといえる。英国では、一九九〇年代までは「農村ツーリス



【図】グリーン・ツーリズムの概念図

ム」という用例が主流で、GTは「ストランドや一部の地域で、近年、環境負荷の軽減を意識して使用されているもの」一般的ではなくむしろ「持続可能なツーリズム」という概念に変わりつつある。それはツーリズムによる負の側面としての環境への負荷の低減とともに、経済的社会的意味における持続性の確保の意味が込められている。

GTの妙味は、地域の豊かな生活文化の機微に触れることにある。本物の素材を活かし、伝統的な手法を継承しながら、ていねいに作り上げる食や農や工の営みは、商業化、産業化したシステム社会が失った貴重な文化である。それは実は、農山漁村に限られているものではなく、都市においても継承されてきたものである。しかし、そうした貴重な都市生活文化は、ともすれば商業資本やマスメディアによる観光開発や不動産による住宅開発によって変容を余儀なくされ、大半が消滅あるいは商業化の危機にある。

GTは、そうした外部資本等による開発行為と対峙して、地域生活者と心の通い合う交流をとおして、貴重生活文化を保全・継承することが目的とされる。地方の住民が都市を訪れ、質の高い都市生活文化と触れ合い、また元の生活に戻る。こうしたアーバンツーリズムが、今後期待されよう。

神楽坂のような庶民の生活文化との触れ合いに加え、歌舞伎座の見学や都内の文豪の生活拠点を巡るツアーも面白い。都市観光といえば、遊興施設や名所旧跡巡りが定番であるが、より都市生活文化に近づくツアー企画は、今後重要になる。その際、一人暮らし老人のマンション

の空き室をB&B (bed and breakfast) 化することも可能であろう。その意味でも、英国のような厳格な基準に基づく品質保証および管理支援方式の確立が必要である。

「神が田舎を創り、人間が都市を作った」。一八世紀の英国詩人のウィリアム・クーパーのこの言葉は、人間の行為のあり方を問うている。神が創造した自然を人間が破壊してきた事実を踏まえ、人間の手で新たな世界を築き上げる。それは無機的な空間ではなく、命と心が通いあう豊かな生活文化空間の創造であり、その場における人間的交流の展開こそがGT、すなわち持続可能なツーリズムの本質的意義といえよう。

CEL

〔参考〕関係団体のホームページ

NPO法人「粋なまちづくり倶楽部」

<http://www.syoutengai-web.net/kimachi/>

NPO法人「環境ネットワーク・文京」

<http://www.en-bunkyo.org/eoor05.htm>

□ 青木 辰司(あおき・しんじ)

東洋大学社会学部教授、在英グロスターシャー大学田園地域コミュニティ調査研究部学術研究員。一九五二年山形生まれ。東北大学大学院教育学研究科博士課程単位取得。秋田県立農業短期大学専任講師、東日本国際大学助教授を経て二〇〇〇年より現職。環境共生の社会学への視点からグリーン・ツーリズムやグランドワーク等、英国の先駆的実践を研究し、日本型の都市農村関係構築について実践的な提案を指摘している。著書は、「グリーン・ツーリズム実践の社会学」(丸善)、「有機農業運動の地域的展開」(共編著、家の光協会)など。